

氏名	吉田 恵理
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	乙 344号
学位授与年月日	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	中原中也 詩の方法と批評の研究
審査委員	(主査) 石川 巧 (立教大学大学院文学研究科教授) 金子明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 坪井秀人 (国際日本文化研究センター教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

第Ⅰ部 詩の《フォルム》を読むための視角——呼吸・時間・翻訳

序

第一章 批評としての《小児》と方法としてのパロディ

第二章 「急ぎ過ぎた」ランボーと少年の時間—二つの「少年時」

第三章 盲目の時間——未発表〈蛙〉詩群と「蛙声」

第四章 散文のなかの非散文的なもの——富永太郎「鳥獣剥製所 一報告書」論

第五章 翻訳する身体、Honte と恥のあいだ——富永太郎「無題 京都」を中心に

第Ⅱ部 詩はいかにして死を書くか

第六章 〈喰い〉と〈誠実〉の詩学——中原中也の〈ユーモア〉について

第七章 「秋岸清涼居士」の〈道化調〉——中原中也と〈宮沢賢治〉

第八章 骨を見る靈魂——「骨」論

第九章 〈神経衰弱家〉と詩の言葉の生成過程——「千葉寺雑記」の詩篇を読む

補論 屍と詩——辺見庸「眼の海——わたしの死者たちに」

結語に代えて

参考文献

初出一覧

あとがき

(2) 論文の内容要旨

第Ⅰ部では、詩の《フォルム》を読むためにどのような視角があり得るかを考察している。

第一章では、中原中也の批評的言説に初期から登場する《小児》、それと微妙に差異化される〈子供〉の語彙との関係の論理を追跡している。ベルクソン由来の「純粹持続」とともに登場する「小児の感動の立場で行為する」(1927)という宣言に始まる《小児》が、〈子供〉という無意識的、他力志向的な創作理念（「詩心」）を裡に含む発想であると同時に、「子供のやうに息を吸ひ、大人のやうに息を吐く」という二極を往還する方法意識、あるいは「希望と嘆息の間を上下する」力能の謂であることを論証している。その上で、北原白秋の『思ひ出』(1911)をパロディ化する詩篇「雪の宵」(1930)を取り上げ、戦時下の「少国民」を用意する概念でもあった白秋の「童心」を問題化しつつ解釈を試みている。詩の解釈を通して、中也の《小児》の方法が、一篇においては規範的な感傷や郷愁を転倒させるようにプレテクストを解体・再構成するパロディの批評的侵犯となっていることを論証している。

第二章では、「小児の感動の立場で行為する」という宣言が書かれた1927年前後の「少年時」二篇を、詩のなかの時間性をどのように解釈できるかという観点から考察し、分析を試

みている。考察に際しては、「少年時」二篇と同時期に書かれたアルチュール・ランボーについての未発表評論「小詩論」（1927）を取り上げ、小林秀雄の「人生斫断家アルチュール・ランボオ」（1926）と共有していた「急ぎ過ぎた」ランボーの表象を確認しつつ、小林のランボー論と異なる文脈を明らかにしている。

第三章では、未発表評論「芸術論覚え書」（1934）と第二詩集『在りし日の歌』（1938）の掉尾^{ちようび}を飾る「蛙声」に未発表詩四篇を加えた〈蛙〉詩群の分析を試み、「盲目」の詩法と呼ぶべき方法論について論述している。「芸術論覚え書」は「名辞以前」のタームで知られる詩論／芸術論であるが、本論では、問いを問う「盲目」の時間が詩の中でどのような叙法を以て引き延ばされつつ表現されているかを読む必要があると問題提起し、〈蛙〉詩群を競合や矛盾を含めてさまざまな叙法を試みる作業として分析している。

第四章では、富永太郎の代表作とも言える散文（詩）「鳥獣剥製所 一報告書」（1925）を細部に亘って読解し、詩と散文というジャンルの対立では摺むことの出来ない、富永の〈歌う〉ことと〈語る〉こととの葛藤を孕んだ方法意識を探っている。特に、同作においては脱自的な瞬間を「報告」しようとする〈語り〉のなかに意味の奥行を失ったフランソワ・ヴィヨンの〈歌〉が翻訳体で引用され、それが擬音語に変化していくという過程を《詩形(フォルム)》という観点から問題化している。

第五章では、[恥の歌外三篇]（1925）として『山繭』に同時掲載された富永太郎の四篇の詩の分析を行い、特に四番目に配置された「無題 京都」に〈京都〉を彷徨する身体、および翻訳する身体が対象化されていることを論証している。前者の身体性の考察にあたっては、梶井基次郎の「檸檬」（1925）とその先行研究を補助線とし、一篇の構造分析を通して「檸檬」の「私」が自らに転移させることのできた「詩人」の身体をさらに対象化しているのが富永の詩篇なのだ^{のだ}と位置づけるとともに、初出形態が形成する「恥の歌」との連続性を踏まえ、翻訳言語を活用した押韻、漢語、構成によって、語る主体と語られる対象との安定した関係が攪乱されること、翻訳する身体と翻訳のプロセスに抱え込まれる断層や言語の増殖が可視化されることを指摘している。

第Ⅱ部では、中原中也の詩の批評性を《フォルム》の問題と関連付け、特に詩の《フォルム》が《死》をどのように構造化しているかを分析している。

第六章では、富永太郎への追悼文（1926）に現れるボードレールの〈ユーモア〉を起点に、中原中也の晩年の詩篇「夏と悲運」（1938）と「春日狂想」（1937）の読解、および〈微笑〉や〈嗤い〉の表象をもつ中也のチェーフ論について分析と考察を行っている。そこで析出したのは、〈嗤い〉の超越的な審級を読者に暗示しながら同時にそうした審級が解決や解放を齎さないことを明示する、イロニーともカーニバル的な〈笑い〉とも異なる、詩のなかの「対他する」場に駆動する〈ユーモア〉の機能である。特に、「述志」の系譜の到達点と目される「春日狂想」においては、愛するものを失ってメランコリーの状態に陥る「なほもながらふ者」の語り口や詩のリズムを契機とした〈ユーモア〉が、いかにして生／死に対する主体としての支配を回復しようとする〈倫理〉を批評対象としつつ《死》の他性と向かい合

うかを論証している。

第七章では、実弟の戒名を詩題に掲げる未発表詩篇「秋岸清涼居士」（1934）と、同時期に集中して書かれた〈宮沢賢治〉論との関連を考察している。「秋岸清涼居士」を含め、この時期に中也は〈道化調〉の詩篇を幾つも制作しているが、そこには〈宮沢賢治〉からの引用を複数確認できる。本章では、〈宮沢賢治〉評価が急速に高まる賢治没後の同時代状況に対する中原中也の位置を問い直すために、中也の賢治論を「全集」観と「作品」論に分けて読み直し、宮沢賢治の「原体剣舞連」（1924）からの引用を有する「秋岸清涼居士」を精読し、特定の言表主体に還元不能な〈道化調〉の身振りと《死者》への名づけをめぐる詩の構造との関係について論じた。

第八章では、中原中也の詩のなかでも人口に膾炙した一篇である「骨」（1934）について、先行研究の静的(スタティック)で対立図式的な見方を乗り越えることをめざしている。「骨」は、〈僕〉という一人称が放逐され〈骨〉が主格として屹立するというプロセスをもっている。本論では、その展開を、いったん発した言葉を後から追いかけるように駆動する発話行為と発話位置の移動を含む詩の動態として読む方法を提示している。解釈を通じて得られた見解から、ロマンティッシュ・イロニーを媒介した近代の抒情詩の歴史における、超越的主体と《詩》の表象の親和性をめぐる議論において、詩の中の人称と発話位置の移動が問題化されることを論じた。

第九章では、中原中也の晩年における精神病院での療養生活中に書かれたノートと詩「道修山夜曲」「雨が降るぞえ一病棟挽歌」（1937）を分析・考察している。1936年、幼い息子を亡くして神経衰弱が高じた中原中也は、翌年中村古峽療養所に入院するが、この時治療の一環として義務づけられていた「療養日誌」と私的な雑記帳「千葉寺雑記」が残されている。だが、従来これらの資料と入院中の詩作は〈神経衰弱家〉から〈詩人〉への“回復”の物語を前提に捉えられてきた。本章ではそれを批判的に検証し、「道修山夜曲」におけるセレナーデの叙法と「僕」のしゃがむ姿勢、「雨が降るぞえ」における病棟内の規律を刻印された〈神経衰弱家〉の身体性といった観点を提出することで、詩と身体の強い結びつきが齎している詩の言葉の生成の劇を論じている。

補論では、第二部で考察してきた、詩がいかんにして構造的に《他者の死／死の他性》を抱えるかという問題を現代詩において問いかけるための試みとして、「震災後文学」の代表作とも云われる辺見庸の詩集『眼の海』（2011、但し扱ったのは初出形）に着目し、東日本震災後の詩表現の批評性を考察している。そこには、「わたしの死者たち」を想像することなしに「わたし」という「単独者」の責任を思考することが可能かという問いが生起している。虚構／現実の二項対立では捉えられないような事態に対して詩表現がどのように迫るかという観点から見ると、震災後の辺見の詩は、中原中也の詩法と同様に詩の形そのものが《死》を構造化し、言語に対する批評性となるのだと結論づけている。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論は中原中也の詩と批評を通して、詩の《型》や《叙法》、「流れ」「持続ぶり」「終始ぶり」といった詩脈の動態を考察したものである。申請者は、それを《フォルム》として概念規定し、詩の表現を緻密に分析するとともに、批評や未定稿として残された言説群を丁寧に読み解くことで中原中也における詩の方法を明らかにしている。これまでの先行研究の多くは、孤独や喪失感といった静的な主題に囚われるあまり、詩の表現を詩人の実人生と重ねながら「意味」や「内容」として読み解く傾向があったが、申請者は流動や持続の状態が変転していく《フォルム》という観点からその詩表現を捉え直し、時間や身体性といった問題を抽出することに成功している。また、中原中也の詩における「私」という一人称主格がその発話位置を移動し外部との境界性を蝕知しようとする事、近代の抒情詩における超越的主体と《死》の表象との親和性の問題を明らかにしていること、生者／死者の観念的な弁別そのものを攪乱しようとする試みであることなどを指摘し、詩を読むということとはどのような行為なのか、詩はどのように読まれるべきか、という点に関して説得力のある議論を展開している。

さらに、本論の特徴として重要なのは、(1) 北原白秋が提唱した「童心」のパロディ化による《小児》という概念を提唱したこと、(2) ランボールの「出現と消失」そのものが芸術を破壊する「無頼の芸術」だったと述べた小林秀雄に対して、ランボールの詩は急ぎ過ぎた「叙事芸術」であると批判して方法的訣別を宣言した中原中也の認識のありようを探究したこと、(3) 詩を翻訳行為として翻訳が遂行される過程そのものを構造化しようとした富永太郎からの影響を明らかにしたこと、(4) 萩原朔太郎の実践に学びながら1920年代の詩と散文のジャンル対立を超克しようとした挑発性を指摘したこと、(5) 同時代を生きた宮沢賢治の詩篇を自らの詩に引用しながら〈道化調〉の身振りを獲得していく過程を読み解き、中原中也を同時代の文学場に正しく位置付けるとともに、その先鋭性を多様な角度から抽出したこと、である。補論において、東日本大震災の直後に中原中也の詩篇から「モノ化」する〈屍体〉と「モノ化への抵抗」である言葉との抗争状態を想起して「眼の海—わたしの死者たちに」を上梓した辺見庸を論じていることから分かるように、本論は中原中也という詩人ではなく、彼が志向し方法化しようとした詩表現をひとつの運動体として提起したものである。

(2) 論文の評価

各章において、高い学問的価値を有する話題が精緻に論述されており、中原中也の詩と批評を新たに読み直すだけでなく、彼の方法を同時代の文脈および現代の地平に接続する試みが説得力のあるかたちで達成されている。先行研究を適切に踏まえつつそれを乗り越えていこうとする研究姿勢を有し、草稿や資料を丁寧に読み解きながら自説に説得力をもたせることにも成功しており、高い学術性を備えている。